

チ ョ ー サ ー の 『 ト ロ イ ル ス 』 の 書 簡 に つ い て

及 川 典 巳

12世紀のプロヴァンスの詩人ジョフレ・リュデルの小伝によると、この詩人はトリボリのさる身分高き婦人の噂を耳にするにつれ、やがて見もしらぬ彼女に恋心を抱くようになったという。彼女の美の令名はそれほどまでに高かったのである。波濤を渡り、海原を越える旅に出た彼は、ついに病に倒れた。しかし、念願であった貴婦人を一目垣間見ることが叶い、この世を去ったという。

この話は愛が言葉というものによって呼び覚まされるものだという実例である。ジョフレという詩人が辿った愛の経過はチョーサーのクリセイデが辿った道ではない。だが、彼女の恋は、ジョフレのほうが東方からの巡礼の言葉から生まれたように、パンダルスの語るトロイルスについての言葉によって芽生えたのである。トロイルスが、人の子の恋が常にそうであるように、パラスの寺院で彼女的美を目にして恋におちたのとは対象的なのだ。『トロイルスとクリセイデ』（以下『トロイルス』と略す）第二巻の詩行の大半はそのような言葉のために当てられたといってもよい。チョーサーの構成の工夫、またパンダルスの意識は、言葉を通して彼女の心にトロイルスのイメージを喚起することにあつた。詩人はこの作品の原典としてボッカッチョの『恋のとりこ』を主に使用しているが、『テーベ物語』を聞く場面、クリセイデの聖人伝への言及、パンダルスの対話、アンチゴーネの愛の喜びを歌う歌など、かずかずのモチーフが彼の独創となって原典を敷衍している。そのような要素のなかの一つに書簡がある。それは詩人の全くの独創とはいえないのかも

しれないが。

『トロイルス』という作品はトロイ戦争を題材にして、トロイの王子トロイルスとギリシャ方に寝返ったカルカスの娘で美貌の寡婦、クリセイデの悲恋を描いたものである。この作品の緊密な構成は、つとに指摘されているところであるが、たとえばトロイルスが恋に悩んでいるときに彼のもとに来たのがパンダルス (I, 548), そして恋人が去って絶望しているトロイルスのもとに来るのも彼 (IV, 350), またトロイルスははじめに恋をたわけごとと侮り (I, 194), 死後自分の恋を笑う (V, 1824) といった例の布置が数多い。そして恋人たちの往復書簡もその例の一つであって、この作品の調和と均整の美を形作っている。ちなみに、第二巻と第五巻に対応してあらわれている主な手紙は、はじめて交換された書簡、これらの二通は作者によって語られる要約 (II, 1065-84, 1221-25), また捕虜交換の代わりとして父の許に去っていった彼女に帰りを願うトロイルスの手紙, すでにディオメーデに心を許した彼女が哀れみの気持から書いたという最後の返信, これら二通は全文 (V, 1317-1421, 1590-1631), 合わせて四通の書簡である。

ここで多少長くはなるが、『トロイルス』にたいする諸家の論稿から、これらの書簡に触れた言及をいくつか集めてみることにする。

- 1) 登場人物の読み書きの能力：トロイルスとクリセイデが自筆の書簡を交換していたことは次のような詩句からも分かってくる。「昔彼女の送ってよこした手紙を、九時と正午のあいだに百度もひとりで読み返した」(V, 470-72)¹⁾。また、こうした手紙が間違いだらけの走り書きというものでもない。パンダルスがトロイルスに最初の手紙を勧めたとき、心配の種といえば、読み書きの力ではなく、むしろ書き過ぎて悪い結果にならないかということだった²⁾。
- 2) トロイルスの感情教育：これはパンダルスによってまったくの初歩から始められる。彼は必死になって話のきっかけを探るのだが、トロイルスは無知で、また無頓着である。ニオベの話 (I, 759) も、オエノーネの手紙も、トロイの宮廷には伝わっていたはずなのに、知らない (I, 656-57)。トロイルスが手紙を書く羽目になったとき、パンダルスの訓戒が微細にわた

るものになったにしても不思議はない。手紙は恋のゲームの中の重要な要素になっているからだ。クリセイデは彼のはじめての手紙を読むまえに、おそらく立派に書かれた手紙の例をすでに見ていたはずである。「彼の手紙はどうお思いか」(Ⅱ, 1197)というパンダルス問いには、頼りのない弟子にたいする心配のほどがよくあらわれている³⁾。

- 3) パンダルスの助言の基準, など: 『恋のとりこ』の恋は自発的である。一方チャーサーのほうは、パンダルスがおのれの基準にもとづいて、恋の指南を受持つ。そして、ヴァンソーフの『詩学』の一節が、文学好きの彼の思念をよぎったとしても不思議はない(I, 1065-72)。その思いはトロイルスにたいする書簡についての助言のなかに明示される。彼にとって、手紙というものは思いつきのものであってはならず、よく考えられた叙述であり、最大の効果を上げるように仕組まれたものである。読み手の感情に冷静に働きかける一方(涙もその効果の一つである)、自分の気持を押え、形への工夫を凝らすことである。手紙によって恋をより芸術的な型に形づくるといふ考えから、彼は愛の修辞学に比較的うとい恋人たちの強い味方になっている。また、チャーサーは書かれたものを尊重する女性としてクリセイデを描いたが、これも原典にはない特徴である。彼女はボッカッチョの女主人公よりも激しく書簡に反応する。それがたんなる伝言ではなく、書かれた形になって運ばれてきたからだ。きっぱりと「手書きも消息も、このことに触れたものは、願わくは、わたしのもとにたづさえないでください」(Ⅱ, 1130-32)という。彼女の返信にたいする慎重な態度についても同じことがいえる。「誓って、これはかりそめにも、わたくしの書く初めての手紙です」といって、経験の無さを訴える⁴⁾。

- 4) 書簡術との関係: これらの恋人たちの往復書簡(Ⅱ, 1065-1337)についての記述は *dictamen prosaicum* (書簡術) の理論とは無関係といえる。だが、当時の書簡の慣行がチャーサーの記述に反映しているところはあるだろう⁵⁾。

これらは、4)を除いて、比較的新しい論考からの抜粋だが、そこに共通するものは第二巻の最初の書簡をめぐるものである。だが、それぞれ問

題の所在を明かし、書簡の意義をよく伝えている。すでに言い尽くされた感もしないではないが、以下、最初の書簡をめぐり、4)の所説への反駁として、書簡術とパンダルスの助言、またトロイルスの手紙との係わりについていささか補足してみよう。

*

4世紀のローマの修辞家ユリウス・ヴィクトルは、理屈に終始し、雄弁に類する修飾の言葉の多い公的な書簡と区別される、私的書簡の要諦として、簡潔さと明晰さを要求し、難解な字句、意味のとれないことわざ、また奇異な言葉の使用を避けるように教え、また友情を示す手段として自分の手で書かなければならないと説いている⁶⁾。14世紀のチョーサーも『トロイルス』のなかでパンダルスの口を借りてさまざまな訓戒を語っていることはすでに上の諸説にも言及されているところである。それはボッカッチョの原典にはないチョーサー自身の逸脱の形になっているが、その意味で彼の書簡にたいする認識の一端を伝えるものとしてみていいであろう。そのいくつかを引用してみると、「おのれの手で手紙をしたため」ること(II, 1005)、「あまりに傲慢な筆ぶりに書きつづったり、理屈をこねて文章を固くするような真似はしてはならない。また代書屋のように、技巧的に書かぬよう、またやさしく麗しい言葉は、いかにすぐれていても、ゆめ再三繰返してはならない」(II, 1024 ff.)、「また恋の言葉の最中に、物理学の言葉を用いるような不調和なものを混同せぬよう、たえず内容に適する形式を守って一貫してほしい」こと(II, 1039-40)、等々である。そして親書の勧め、公的な書簡と私的な手紙の区別、簡潔さなど、そこに表現の違いはあるけれども、4世紀の修辞家の引き写しともとれるものである。また、一応書簡の常識を伝えているように、現代にも立派に通用する為になる教訓といえる。だが、チョーサーにあってほかにないもの、それは上の3)でも言及されているように、形式にたいする顧慮の差だけだったのである。

こうしたチョーサーの、また当時の人々の形への意識を理解するためにも、

それが書簡というものにどのように反映されていたか見てみよう。ここでは W.D. パットの、初期の書簡術に関する論稿の一部を借用することにする⁷⁾。

第一に、手紙の書き方が問題である。中世の人々にとって、書簡は一番普及した形式ではあったが、思想や感情の自然な表現の場ではなく、約束事に近いものだった。一定の規則に縛られて書くものと決まっていた。その規則は時代とともに形式化の一途をたどり、まさに繁文辱礼の極みに達するのである。それは上位、下位、また対等という身分の差に応ずる挨拶のしたため方、書簡の部分にかんするもの、そして各部の配列に関するもの、等々にわたり細かく規定したものである。つまり、これらの規則を守備範囲として書簡術が発展したのである。第二に、上のような規則で書かれた書簡の性格は公的なものであって、公開状と同じで、私的な要素はほとんど持っていない。それは多くの人びとの間で読上げられ、聞かれるものだった。だからこそ、丹念に書かれ、言葉使いに細心の注意が払われたのである。当時の皇帝や教皇や、また国王の書簡などはたんに通知、命令、要求などを伝える手段ではなく、明示されていようとなかろうと、イデオロギーのなんらかの表明であったのである。第三に、書簡集というものが早くから文学様式の一つになったことである。書簡の内容が事実に合わせているか否か、教理に合わせているか否かなどは二の次で、もっぱら文体面だけで評価され、書簡集として編まれていたのである。また論争にも書簡の形式がとられたり、ついには、公私の文書が書簡の書式にならって作成され、公証人になるためにも書簡術の知識が必要となっていた。結局、書簡というものが中世の一般の伝達、行政、布教、教育の各方面で第一の手段になっていたのである。

このような特徴は異常なまでの形式への関心から生まれていることが分る。そして中世の人間は「夢想家でもなく、漂泊者でもなかった。彼は組織者、編集者、組織の樹立者だった」という、C.S. ルイスの言葉によって、それを一般化することが出来るかもしれない⁸⁾。「彼は区分、定義、そして表の作成が大好きだったのだ。」紋章、騎士道の作法、愛のおきてがそのような例である。また、そのような愛のおきてそのものが地球を取巻く九つの天界を動かす至高の愛を含む宇宙のなかに組込まれていたのである。その例の中に書

簡術を置いていいものかどうか知らないが、少なくともルイスの指摘した中世人の嗜好といえるものがそこに働いていたことは確かであろう。書簡術の理論家たちの体系化の努力のかけには、この技芸を自由学科の一つに組織しようとする意志があったのである。

中世の修辞学が書くための技術、また話すための技術として発展し、前者が書簡術と文法術（いわゆる詩学）となって散文と詩を分担し、また後者が説教術として三つの分野に整理されていることはその方面の著述をみると分ってくる。また書簡術が中世において、重要、かつ興味をそそる分野であるということも、それが最初に形を成したという事実とともに、当時の文化、また社会の動きを反映しながら、文字通りの書簡術、手紙を書く技術になっていった過程をみれば理解できるのである。

しかし、チャーサーが当時の修辞学に通暁し、書簡術の理論に精通していたということは、簡単に首肯できることではない。チャーサーの修辞学上の知識は1926年にJ.M. マンリーによって肯定され、64年にJ.J. マーフィーに否定され〔3頁、4参照〕、今に続いている問題だからである。ここでは、それを指摘するだけにとどめ、深く立入らないが、詩人と書簡術との係わりについていえば、最近のW.D. パット⁹⁾やM. カマーゴの批判¹⁰⁾、J. マッキンネルの推定¹¹⁾、またJ.D. バンリーの見解などに聞くべきものが多々あるとしておきたい¹²⁾。それは中世の書簡術が今も変わらず未開拓な領域であり、その創始というものが11世紀イタリアのアルベリックによるという定説も現在見直される状況にあるということである。またチャーサーが公務員、外交官という経歴につく前に必須な知識として書簡術を身に付けたということや、またそれが文例集のような手引から得られたものであったにせよ、その手引の多くが書簡術の理論書を範にして作られていたということを想像することである。さらに、詩人が作品の随所に振りまいた知識についても、ソースの同定をどうこう言うよりも、その言及の意味するものを作品の性格や文脈のなかで把握し、そこに詩人が体得していたと思われる広範な詩学を学んでいこうとする態度といえる。たとえば、パンダルスの言葉にある堅琴師の比喻については（II, 1030-36）、ホラティウスの『詩学』が源泉とされている。

だが、その比喻の文脈上の意味は源泉と異っている。なぜ意味を変えて使用したかということが源泉の同定より問題になるといってよいであろう。ところで、パンダルスの助言と書簡術の関係だが、その有無を明示するような言及は確かでない。だからそれと無関係だとするのでもどうであろうか。彼の訓戒とトロイルスの書簡との関係のなかにそれをみようとしたりどうであろう。

トロイルスの手紙に移る前に、書簡構成の規則の一部を具体的に挙げてみることにする。12世紀のポーニャは書簡術の中心地で、そこで書簡術が完成されたといわれている。数多くの著作がそこで生まれたが、そのうちの一つに、作者不詳の『書簡作法』(*Rationes Dictandi*, 1135)というのがあり、これが書簡術の標準的なものとされ、その後の模範となっている。この書によると、書簡の構成は五部が範とされ、以下のように挨拶、好意獲得(以下「好意」と略す)、叙述、要求、また結語の各部に分かれ、各部の省略、構成の順序などが記述されている。本全体の三分の二が挨拶の部に当てられ、かなりの例が示されていることが大きな特徴である¹³⁾。

〔書簡の構成〕

1. *salutatio* [挨拶] 受取人の身分・社会的地位に応じた文体で書く。差出人の名前は謙虚に表現し、相手の名より自分の名を先に書いてはいけない。
2. *benevolentiae captatio* [好意] 相手の好意を得るには、相手を誉め讃えたり、自分を謙虚に述べたり、知人に触れたり、相手に何かを約束するといったいくつかの方法がある。この部分は挨拶に含めてもよい。
3. *narratio* [叙述] 過去、将来、現在進行中の出来事、状況の説明。単一の場合と複数の場合の二つがある。
4. *petitio* [要求] 叙述と同じく、単一の要求と複数の要求がある。要求の調子によって、九つの型、つまり、嘆願、説得、脅迫、勧告、奨励、警告、忠告、訓戒、また普通の要求などに分かれる。
5. *conclusio* [結語] 話の筋からくる結論でもよし、内容の要約でもよい。ここで約束が相手の出方次第であり、逆の場合もあることを述べ、要求を繰返すことができる。

[省略の項]

「結語」は場合に依じて省くことができる。簡潔をよしとするからである。「挨拶」や「好意」は相手を侮蔑する意志がある時、また双方の名前を秘密にしておきたい場合省くことが出来る。書簡の体裁は「挨拶」のほか「叙述」と「要求」のいずれかがあれば整うものとする。

[構成の順序]

上に述べた順序が望ましい配列だが、例外はある。「好意」を「叙述」の後、また「要求」や「結語」の後に廻すと効果はある。また「要求」を「叙述」の前に置いてもよい場合がある。ただ慎重に内容が要求とそれに関する説明という筋を通すことである。複数の叙述と要求はそれぞれ別個に扱って、混同しないよう注意すること。

**

トロイルスの最初の手紙はボッカッチョの原典が10のスタンザ80行の全文を載せているのにたいし、3のスタンザ20行の要約である。しかもそこには語り手の評語、つなぎの言葉が繰返され、チョーサー独特の構成になっている。要約とはいえ、その構成を分析するには充分の量を持っている。チョーサーが要約した意図は、たとえばS.B. ミーチが第二巻全体の劇的效果を狙ったという明敏な洞察もあるが¹⁴⁾、ここでは上述した書簡術の規則をもとに、形式への意識を背景にして、この手紙をみてみよう。

First he gan hire his righte lady calle,
His hertes lif, his lust, his sorwes leche,
His blisse, and ek thise other termes alle
That in swich cas thise loveres alle seche ;
And in ful humble wise, as in his speche,
He gan hym recommaunde unto hire grace ;
To telle al how, it axeth muchel space.

And after this, ful lowely he hire preyde
To be nought wroth, thogh he, of his folie,
So hardy was to hire to write, and seyde
That love it made, or elles most he die ;
And pitousli gan mercy for to crye ;
And after that he seyde, and leigh ful loude,
Hymself was litel wroth, and lasse he coude ;

And that she sholde han his konnyng excused,
That litel was, and ek he dredde hire soo ;
And his unworthynesse he ay acused ;
And after that, than gan he telle his woo ;
But that was endeles, withouten hoo ;
And seyde he wolde in trouthe alwey hym
 holde,—
And radde it over, and gan the lettre folde.

(II, 1065-85)¹⁵⁾

‘*First*’ に始まり, ‘*and after this(that)*’ の繰返し, 終りのダッシュは, ほかでもない書簡の構成の区切りを端的に示している。またその区切りで挿入される語り手の評語は一層それを強調している。最初の六行は「挨拶」と「好意」の両方を兼ね, 次に「要求(懇願)」(1072-6), それに改めて「好意」がしたがいが(1077-81)自分が価値なき身であることを訴え, それに「叙述」が続き, 悲痛な悩みが述べられ(1082), 短い「結語」(1084)で終わっている。ちなみに, 原典のトロイロの書簡の構成に触れてみると, 書出しの「わたしがあなたという人のために, かくも苦しみ, 惨めで, 思いに乱れているのに, どうして作法にしたがって, 挨拶の言葉など贈れよう」に始まり, 愛の女神の命により書かされていると述べ「叙述」, 彼女の慈悲を願い「要求(懇願)」, 「結語」の順になっている。これに比較するまでもなく, トロイルスの手紙

の構成は、五部の構成の範にしたがいながら、「要求（懇願）」を筋の通らない「叙述」の前に出し、その間に「好意」を挟んでさらに構成の乱れを呼んでいるということになる。ここではとくに触れようとしなかったが、ちなみに第五巻の全文の手紙の場合でも、彼は単一と複数の混同を避けよという規則を犯しているのである。

パンダルスがトロイルスに与えた助言は、「自分がいかに惨めな想いに悩んでいるかを告げしらせて、かの女の哀れみを乞え」というものだった。換言すれば、「叙述」に始まり、「要求（懇願）」に終ればよかったのである。トロイルスはこの勧めに従わなかった。パンダルスの心配は現実になったのだが、これにたいする反応は最初の読者であるクリセイデに任せてよい。いまはチャーサーの意図の一端を想像してみよう。彼は五部という書簡術の構成の規則を知っていた。そして、それらの配列の規則も心得ていた。彼は書簡術の理論家ではなかったから、実作によってそれを示そうとした。しかも、要約することによってその構成はより明瞭に示されるのだ。長くはないその要約のなかで、「挨拶」と「好意」に多過ぎる言葉さえ割いている。この二部は書簡術の最大の関心が向けられていたところ、また繁雑な約束の多いところであるが、彼はその形式にも忠実に応えている。しかし、その「好意」の書出しで「これは大いなるいつわりである」と批判をさし挟む。これはトロイルスの誤ちを責める一方、また半面でこの部を大層なものとする書簡術の規則への当てこすりともとれるのだ。

クリセイデは、ひとりひそかに、トロイルスの手紙の「各行の言葉に逐次目をとめたが、なんの欠点とともなく、身の程を知った人かな」（II, 1177-8）と思う。そして、「手紙はどうお思いか。文章は巧みかね。ほんとにわたしには何も分からないのだが。」というパンダルスの間に、頬を染めながら口ごもりつつ、「お巧者です」（II, 1196-9）とだけ答える。これがトロイルスの手紙の最初の読者評であった。彼の文章の構成の乱れに気が付かなかったわけではない。それに気付いたからこそ、このような答ができたとも思える。トロイルスが書いた最後の手紙にたいする返信が哀れみの気持からであったように、ここでの好意ある批評も彼女の憐れみからだったということが理解

できよう。そして、この乱れはその想いを誘い出すという、パングルス、いやチャーサーの計算だったといえれば言い過ぎであろうか。憶測をさらに重ねれば、原典のほうが「挨拶」のなかで並みの作法にしたがわぬといった言い方で逆の効果を狙ったものであったとすれば、この乱れはよりいっそうの効果を収めたのだ。それは「涙をちょっぴり混ぜた」以上のものだった。パングルスの彼女にたいする恋の指南は一步完成に近付いたのである。

クリセイデのトロイルスにたいする返信はどうだったであろう。それは、パングルスの「あの方にその好意を謝し、あの方の命のつきないようにはかれ」という助言そのままに、また彼女の最後の書簡を思わせるように、きわめて模範的なものだった。語り手の要約(Ⅱ, 1221-25)によれば、

She thanked hym of al that he wel mente
Towards hire, but holden hym in honde
She nolde noght, ne make hireselven bonde
In love, but as his suster, hym to plese,
She wolde ay fayn, to doon his herte an ese.

(おのれに向けられた彼の好意に謝しつつも、彼にあだな望みを抱かすことを願わず、またおのれも愛のきずなを結ぶことを求めず、ただ彼の妹として、進んで彼のところを安んじたいと望んだのである。)

注

- 1) 本稿のチャーサーの引用は、F.N.Robinson (ed.). *The Works of Geoffrey Chaucer* (2nd ed.). Houghton Mifflin, 1957. に拠り、またチャーサーの邦訳、ボッカッチョの『恋のとりにこ』の英訳については、それぞれ刈田元司、Havellyの訳を使用している。
- 2) Orme, p.54.
- 3) Green, pp.212-13.
- 4) Windeatt, pp.122-23.
- 5) Murphy (10), p.11.
- 6) Murphy (12), p.196.
- 7) Patt, pp.134-35.

- 8) Lewis, p.10.
- 9) Patt, pp.135-55.
- 10) Martin Camargo, "The English Manuscripts of Bernard of Meung's *Flores Dictaminum*," *Viator* 12 (1981), pp.197-98.
- 11) Mckinnell, p.79.
- 12) Burnley, pp.284-86.
- 13) Murphy (ed.) (12), pp.7-24.
- 14) Sanford B. Meech, *Design in Chaucer's "Troilus"*, Syracuse Univ. Press (1959), pp.44-46.
- 15) 訳：まず初めにかの女をわがまことの女性，わが心の生命，わが希み，悲しみの癒し手，わが幸と呼び，またかかる場合恋人たちがすべて求める言葉をもあまさず用いてかの女を呼び，言葉ぶりのみならず心もいとへりくだって，自分を推してかの女の恵みを乞い求めた。この始終を語るのは，あまりに時を費すわざである。次に彼はいと心ひくく，たとい私が愚かのため，手紙をしたためる暴挙をおかしても，ゆめ怒りたもうなといのり，これもみな恋のなせるわざで，さもなくばこの身は死ぬばかりと言って，いたましくもかの女の情を懇願し，次に，いと大いなるいつわりではあるが，おのれの価値は乏しく，知るところも貧しいきわみだなどと言った。また貧しきわが知識をゆるしたまえ，おんみをいたくおそれる私ですと言い，自分の身の価値なきを責めたのち，悲痛な悩みを語りはじめた。されどそれはめんめんとして涯しなく，私は永えに信実を守り通そうと言い——やがて手紙を読みかえして，それを折りたたんだ。

参 考 文 献

- 1) Burnley, J. D. "Chaucer, Usk, and Geoffrey of Vinsauf," *Neophilologus*, 69, (1985), 284-93.
- 2) Bowers, John M. "How Criseyde Falls in Love," *The Expansion and Transformations of Courtly Literature* edited by Nathaniel B. Smith and Joseph T. Snow. Univ. of Georgia Press, 1980, 141-55.
- 3) Green, Richard F. "Troilus and the Game of Love," *The Chaucer Review*, 13 (1979), 201-20.
- 4) Havely, N. R. (ed. and trans.) *Chaucer's Boccaccio: Sources of Troilus and the Knight's and Franklin's Tales*, D. S. Brewer, 1980.
- 5) Karita, Motoshi. (trans.) *Koi no Toriko*, Shinkousha, 1983.
- 6) Lewis, C. S. *The Discarded Image*, Cambridge Univ. Press, 1964.
- 7) McKinnell, John. "Letters as a type of the formal level in *Troilus and Criseyde*," *Essays on Troilus and Criseyde* edited by Mary Salu. D. S.

- Brewer, 1979. 73-89.
- 8) Murphy, James J. "The Arts of Discourse, 1050-1400," *Medieval Studies*, 23 (1961), 194-205.
 - 9) —. "A New Look at Chaucer and the Rhetoricians," *Review of English Studies*, 15 (1964), 1-20.
 - 10) —. "Rhetoric in Fourteenth-century Oxford," *Medium Aevum*, 34 (1965), 1-20.
 - 11) —(ed.). *Three Medieval Rhetorical Arts*. Univ. of California Press, 1971.
 - 12) —. *Rhetoric in the Middle Ages: A History of Rhetorical Theory from Saint Augustine to the Renaissance*. Univ. Of California Press, 1974.
 - 13) Orme, Nicholas. "Chaucer and Education," *The Chaucer Review*, 16 (1981), 38-59.
 - 14) Patt, William D. "The Early *Ars Dictaminis* as Response to a Changing Society," *Viator*, 9 (1978), 133-55.
 - 15) Windeatt, Barry. "Love That Oughte Ben Sucre in Chaucer's Troilus," *The Chaucer Review*, 14 (1979), 116-31.

(筆者 岩手大学人文社会科学部助教授)